今月のことば　　令和4年（2022）3月　＜No.187＞

メッセージを語り継ぐ

親鸞ゆかりの不思議がある。一度に八つの実がなるという「八房の梅」だ。

ある日のこと、佐吾助の家を訪れた親鸞に夫婦は心ばかりの粥と梅干しを出した。それをおいしく食べた親鸞は庭に梅干しの種を埋め、「人が救われるのは仏の不思議な力。この教えが末代まで広まり、凡夫女人が救われるなら、この塩梅からでも芽を生じて一花に八つの実がなるだろう。これを後の世に示す証拠としよう」と告げる。やがてその通り、塩梅は木となり、実をつけ、人々は親鸞が語った「仏の救い」をよろこんだという。

＊八房の梅は山梨や岐阜、名古屋など各地にあり、県の天然記念物に指定されているものもある。

『親鸞 越後の風景』内藤章 著　より

平成19年、朝日新聞新潟版に「越後の親鸞　伝説を訪ねて」という記事が六十回にわたって連載されました。親鸞聖人が念仏弾圧によって越後に流罪にされてから800年が経つのを機に、企画されたものでした。

担当することになった内藤記者は、かなり悩みました。親鸞聖人の越後での暮らしは謎に包まれており、多くの伝説や伝承は残っているものの、そのルーツはどれも江戸時代以前にはさかのぼれないからでした。しかし、一年近くかけてゆかりの地を訪ね歩き、伝承を語り継ぐ人々との出会いを通じて、内藤記者には不思議な感情が芽生えてきたといいます。

あるときふと、仏の救いをひたすらに信じる親鸞の言葉に、私自身が揺れていることに気がつきました。熱く、不思議な思いが訪れたのです。それはこんな思いでした。**この世に生きている人はすべて救われる、必ず、どんな「いのち」も、人生も、きっと、救われる。だれひとり漏れることなく救われる…**。

…仏教で、念仏で、いったい人はどう救われるのかと問うことは切実なことだ。しかし、ひょっとすると、それよりもっと大事なことは、**「人は救われる」というメッセージが永遠に語り継がれていくことではないのか、そういう永劫のメッセージこそが人を究極において救うのではないか**、と。

越後の地には、「七不思議」とも呼ばれる親鸞聖人の伝説があります。科学的知見から言えば、どの話もにわかには信じ難いものばかりです。では、人々はそうした荒唐無稽な話を心から信じて語り継いできたのでしょうか？

そこには、**人々の願い**が込められているのではないかと思います。「あらゆる者が必ず救われる」という“にわかには信じ難い”**お念仏の教えに、自分は実際に人生を支えられた、それを次の世にも伝えたいという願い**が、伝説も一緒に語り継ぐことにつながったのではないでしょうか。

慧日山 真光寺